

インドネシア人日本語学習者のアクセントにおける 特殊拍の影響

助 川 泰 彦

1. はじめに

しばしば言及されることであるが、初級日本語学習者に対する発音指導法は理想としては母国語別に開発されることが望まれている（今田 1983 p.123, 重点領域研究「日本語音声」シンポジウム 1991）。また実際に母国語別発音指導のためのシラバスを開発した試みが若干数報告されている（大西 1982, 佐藤 1986, 高橋 1989）。

会話教育の一部門としての発音指導が、単音や語のアクセントの正確さだけでなく文全体のイントネーションの自然さを目標とするべきであることは議論を待たない。それゆえ発音指導法開発の基礎調査として、外国人学習者の日本語発話におけるイントネーションと日本人によるイントネーションとの対照的研究が必要である。しかしイントネーションは統語レベル, 談話レベル, パラ言語情報のレベルなどの諸要因によって決定されるものであり（前川 1990）その分析は慎重な段階と方法論を踏まえる必要があろう。本研究ではその端緒的研究としてイントネーション決定の要因のひとつである語レベルでのアクセントを考察する。

2. 先行研究

外国人日本語学習者の発音を韻律上の特徴について記述した研究には、英語話者を対象とした堀口(1973)と土岐(1980), タイ語話者を対象とした大西(1977), 韓国語話者を対象とした大西(1990)などがある。これらの研究ではいずれも基礎データの収集法として、教科書の一部を学習者に読ませて録音するという方法を取っている。また最近の研究ではドイツ人学習者を対象とした坂間, 他(1991), モンゴル人学習者を対象とした土屋(1991), インドネシア人学習者を対象とした宇田川(1991)らが対話文を朗読させる方法で文末イントネーションを中心に様々な韻律特徴を捉えようと試みている。

3. 調査方法

3.1. 調査協力者

調査にはジャカルタで日本留学のための予備教育を受けていたインドネシア人学習者15名に協力を依頼した。彼らに日本語を教えていたのは、筆者自身（32歳。東京出身）と現地在住の邦人教師（女性。41歳。東京出身）、およびインドネシア人教師（女性。35歳。ジャカルタ出身）の3名であった。録音調査の時点で学習時間は約320時間を数えていた。学習者たちは教室以外では日本語を使用する機会はまったくなかった。この予備教育のコースでは毎朝10分程度の発音練習を行っていた。練習内容は語単位でのリズムの練習と文単位での文末イントネーション、プロミネンスの練習が中心で、本調査のような語単位でのアクセント型の練習は行ったことがなかった。調査の時点まででこの発音練習は約55回実施されていた。

表1に示したように本研究の調査協力者となったインドネシア人学習者は第一言語が一致してはいないが、結果的には第一言語の違いによる偏った傾向は認められなかった。

表1 調査協力者のデータ

No.	性別	年齢	第一言語	10～15歳頃の居住地
1	男	20	ジャワ語	東ジャワ, スラバヤ
2	男	19	ジャワ語	東ジャワ, プロボリンゴ
3	男	19	ジャワ語	東ジャワ, スラカルタ
4	男	19	スンダ語	西ジャワ, バンドゥン
5	男	19	ジャワ語	中部ジャワ, アンバラワ
6	男	19	ジャワ語	東ジャワ, マラン
7	男	19	インドネシア語	西ジャワ, ジャカルタ
8	男	19	ジャワ語	西ジャワ, ボゴール
9	男	19	ジャワ語	東ジャワ, ジョグジャカルタ
10	男	19	ジャワ語	東ジャワ, スラバヤ
11	男	19	ジャワ語	中部ジャワ, スマラン
12	男	19	インドネシア語	西ジャワ, ジャカルタ
13	男	18	ジャワ語	西ジャワ, ジャカルタ
14	女	19	インドネシア語	西ジャワ, ジャカルタ
15	男	18	ジャワ語	西スマトラ, パダン

3.2. 調査項目

一次資料を得るために予備教育のコースで教科書として使用していた『日本語初歩』（国際交流基金）から選んだ50の既習語を表にしたものを読んでもらい録音した。前述の先行研究では教科書の文ないし語をそのまま学習者に読ませたものを録音して資料としていたが、本調査では調査票A（語をかなで書いただけのもの）と、調査票B（調査票Aにアクセント表記を添えたもの）の2種類を準備し録音資料を得た。

表2 調査票A（アクセント表記なし）

1	とおい	26	れいぞうこ
2	どんな	27	おじいさん
3	なんば	28	えいがかん
4	ノック	29	ちゅうしゃじょう
5	ビール	30	しょうがっこう
6	へんじ	31	てんらんかい
7	ぼうし	32	うんどうじょう
8	ゆうべ	33	だいがく
9	りんご	34	アメリカ
10	りょうり	35	あたたかい
11	きっぷ	36	いかが
12	おおきい	37	いくら
13	こうぎょう	38	がいこく
14	ゆうめい	39	かいもの
15	うんどう	40	かたかな
16	せんせい	41	くだもの
17	なんねん	42	カメラ
18	くうこう	43	テレビ
19	さんにな	44	きって
20	じっしゅう	45	きつと
21	ロッカー	46	マッチ
22	きんようび	47	ゆうびんきょく
23	ほんとうに	48	まんねんひつ
24	なんようび	49	そつぎょうしき
25	ていりゅうじょ	50	たんじょうび

表3 調査票B (アクセント表記付き)

1	とおい	26	れいぞうこ
2	どんな	27	おじいさん
3	なんば	28	えいがかん
4	ノック	29	ちゅうしゃじょう
5	ビール	30	しょうがっこう
6	へんじ	31	てんらんかい
7	ぼうし	32	うんどうじょう
8	ゆうべ	33	だいがく
9	りんご	34	アメリカ
10	りょうり	35	あたたかい
11	きっぷ	36	いかが
12	おおきい	37	いくら
13	こうぎょう	38	がいこく
14	ゆうめい	39	かいもの
15	うんどう	40	かたかな
16	せんせい	41	くだもの
17	なんねん	42	カメラ
18	くろこう	43	テレビ
19	さんにん	44	きって
20	じっしゅう	45	きっと
21	ロッカー	46	マッチ
22	きんようび	47	ゆうびんきょく
23	ほんとうに	48	まんねんひつ
24	なんようび	49	そつぎょうしき
25	ていりゅうじょ	50	たんじょうび

調査票Bのアクセント表記は主にアクセント辞典を参考にした。ここで問題になるのは第二モーラに長音のある1, 7, 8, 12, 14, 18, 25, 26, 28, 29, 30である。アクセント辞典ではこれらの語の第一モーラを低いものと表記しているが、これは極端に丁寧に発音した場合の音調であって、標準的な話し言葉としてはかえって不自然に聞こえる発音の仕方である。例えば「とおいえいがかん」という句の場合、かなりゆっくり発音したとしてもピッチ配置はHHHHHLLLとなる。アクセント辞典に従えばLHHLHHLLとなるはずだが、これは話し言葉としては異様に丁寧過ぎる発音と感ぜられる。そこで調査票Bのこれらの語のアクセント表記を辞典に従うか、実際の自然な発音に合わせるべきかが問題になる。

本調査の一次資料の録音ではこれらの語を会話や文、句などの一部分としてではなく、語をひとつずつ区切って発音してもらおうという方法をとったので「極端に丁寧な」発音がアクセント表記通りに行えるか、行えないかを調べることとし、あえて辞典通りに第一モーラを低いピッチとして表記することにした。そのため、例えば「とおい」をHHHと発音したような場合、筆者の直感にとって自然な発音であっても録音資料の分析結果としては「調査票の表記と合致しない」発音として分類されることになる。

3.3. 調査結果の記述方法

録音には下記の機材を使用した。録音の分析は、テープを帰国後筆者がテープレコーダーで聞いて行った。録音された語を日本語の語として聞き、モーラごとのピッチの配置を相対的に聞き分け、1モーラごとにピッチを当てはめて「H」（高）か「L」（低）かを記述したもので純粋に音声学的な記述ではない。聞き取りにくいと感じられる場合はテープの回転速度を半分にして聞き直した。また高低の変化が聞こえない場合はどのモーラもLとして記述した。促音（以下Qとも表記する）を含む語については、Qのモーラには母音がなく音声学的にピッチを聞き取ることが不可能なのでHもLも振り当てないことにした。例えば正しく発音した「マッチ」ならHLと記述されることになる。

録音と再生に使用した機材は表4の通りである。また録音資料の分析結果の並べ換えと選択の作業にはパーソナルコンピュータ NEC PC-9801RX 上でデータベース『桐V3』によって行った。

表4 使用機材

録音	
テープレコーダー	SONY CASSETTE-CORDER WM-D6C
マイクロフォン	SONY ECM-926LT
カセットテープ	MAXELL XL46
再生	
SONY CASSETTE-CORDER TCM-57	

4. 分析の結果

4.1. アクセント型による分類

調査票の語をアクセント型によって分類すると以下のようになる。

表5 調査語のアクセント型による分類

ア型	ピッチ	語数	語
頭高型	HL	2	ノック(*), マッチ(*)
	HLL	5	どんな, なんば, ビール, りょうり, ロッカー(*)
	HLLL	2	こうぎょう, なんねん
平板型	LH	3	きっぷ, きって, きっと
	LHH	6	とおり, へんじ, ぼうし, ゆうべ, りんご, じっしゅう(*)
	LHHH	7	ゆうめい, うんどう, くらこう, だいがく アメリカ, がいこく, かいもの
	LHHHH	3	ほんとうに, ていりゅうじょ, ちゅうしゃじょう
	LHHHHH	1	うんどうじょう

ア型	ピッチ	語数	語
中二高型	LHHL	4	おおきい, せんせい, さんにな, かたかな
	LHLL	6	きんようび, なんようび, れいぞうこ, えいがかんしょうがっこう(*), たんじょうび
	LHLLLL	4	てんらんかい, ゆうびんきょく, まんねんひつそつぎょうしき
中一高型	LHL	1	いかが
	LHLL	1	くだもの
	LHLLL	1	おじいさん

(*は3.3.で述べた理由でモーラ数とピッチ表記の数が一致しない)

4.1.1. 調査票Aの分析 — アクセント型別 —

学習者による発音のピッチ配置の結果をまとめると表6のようになる。

表6 調査票A (アクセント型表記なし) の結果の分析

	ピッチ実現が語のアクセント型と一致したもの (%)
中一高型グループ (N=45)	44%
頭高型グループ (N=180)	33%
平板型グループ (N=300)	49%
中二高型グループ (N=210)	20%

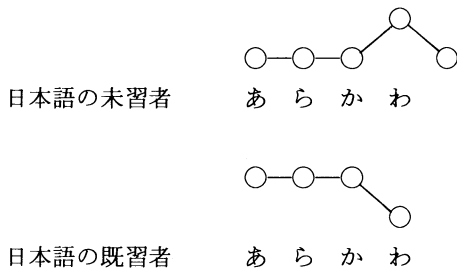
(Nはそのアクセント型に属する語の数と調査協力者の人数を掛け合わせた数)

アクセント表記がないのに中一高型グループと平板型グループでは半数近くが日本語本来のアクセント型と一致するピッチ配置を実現している。一方, 中二高型グループでは同様に一致した例は20%にしか過ぎない。この事実の解釈には3

通りの可能性がある。ひとつはインドネシア人が日本語を発音するとき母語の韻律の干渉で中一高型や平板型のようなピッチの配置で発音する傾向が強く、その結果として偶然に一致したのではないかと見る解釈である。第二の解釈は調査協力者がたまたま調査票の中一高型グループと平板型グループの多くの語のアクセント型をすでに習得していたために表6のように頭高型と中二高型との差が出たと考える解釈である。筆者は第二の解釈の可能性は低いと考える。なぜならばこの調査協力者が中一高型と平板型のアクセントだけを偏って憶えるような機会は320時間の学習時間の中にはなかったからである。第三の解釈は今回の調査協力者の一部が320時間の学習期間を通じて日本語の語が平板型や中一高型で発音されるものと思いついていたのではないかという考え方である。いわば音韻上の中間言語¹⁾を形成した結果として前述のようなピッチの特徴が現れたとする解釈の可能性もある。

第三の解釈の可能性を思い付いたきっかけがふたつある。ひとつは水谷修氏がある機会に語った話で、韓国語学習者がある程度会話が上手になってくると日本語のほとんどの語を平板に発音し始める場合がよくあるそうである²⁾。また大西(1977)にも興味深い指摘がある。大西氏によるとタイ人が日本人の名前を発音するときに日本語を学習したことのないタイ人と学習したことのあるタイ人とははっきりと異なる音調を示す場合があるそうである。以下に引用する。

(「あらかわ」という名前を)日本語を習ったことのないタイ人は _____
 というアクセントで発音しがちであるが、日本語を習ったことのあるタイ人はほとんど絶対と言っていいくらいにこのようなアクセントで発音せず、大抵 _____ のように発音する。すなわち、



となる。(大西 1977, 25~26ページ, 引用部括弧内は筆者による補記)

後者の「あらかわ」のピッチパタンは決して正しいものではない。これをタイ人日本語学習者が学習のある段階で日本人の名前のアクセントについての中間言語を形成した結果であると解釈することができないだろうか。これに対して日本語を全く習ったことのないタイ人が発音した「あらかわ」の音調の方は純粋にタイ語の韻律規則の干渉を受けたものと解釈するのが妥当であろう。

4.1.2. 調査票Bの分析 — アクセント型別 —

表7を見るとやはり中一高型と平板型グループが中二高型よりもインドネシア人学習者にとって発音しやすいピッチ配置であることが分かる。

調査票Bには語のアクセント型が、かな表記の上に直線で示してあり、多少日本語のアクセントについて客観的な知識を持った日本人であればそのピッチを指定通りに発音することは容易であろう。しかしインドネシア人学習者にとってはアクセント表記が施されているからといって誰もがその通りにピッチを実現するのはさほど容易でないことが分かる。67%、64%、59%という数値を高いとみるか、低いと見るかは今回の調査だけでは比較の対象がないので何とも言えない。誤りの率に注目してみると、中一高型グループで33%、頭高型グループで36%、平板型グループで41%、そして中二高型グループでは67%がピッチ配置を誤っているが、四種類のアクセント型の中で特に中二高型に際だって誤りが多いのはどうしてであろうか。

表7 調査票Bの分析結果 — アクセント型別 —

	表記の通りピッチを実現したもの (%)
中一高型グループ (N = 45)	67%
頭高型グループ (N = 180)	64%
平板型グループ (N = 300)	59%
中二高型グループ (N = 210)	33%

なお調査票Bの調査では15名の調査協力者のうち1名が98%（50語のうち49語）という高い率で表記の通りアクセントを発音していたが、外の14名の結果は26%から80%の間にはほぼ均等に散らばっていた。

表8 調査票Bをアクセント表記の通り発音した率

表記通り発音できた率	21%－40%	41%－60%	61%－80%	91%－100%
調査協力者の数	6	4	4	1

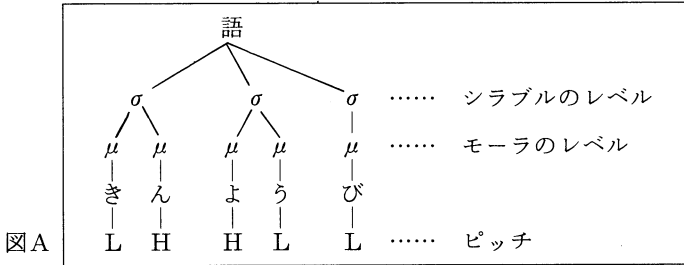
調査票Bの中二高型の語の誤りにどのようなピッチ配置の傾向があるか調べてみた。

表9 中二高型を表記通り発音できなかった発音のピッチ配置の傾向

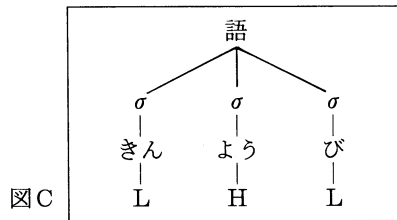
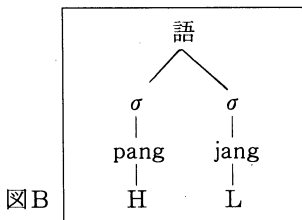
① LHHHHH, LHHHH, LHHH	44例 (31%)
② HHL L L L, HHL L L, HHL L	21例 (15%)
③ LHHHHL, LHHHL	20例 (14%)
④ LH L L L L, LH L L L, LH L L	15例 (11%)
⑤ LL H H H, LL H H, LL H H L, LL H L L	14例 (10%)
⑥ その他	26例 (19%)

①は平板型のアクセント及び④は中一高型のアクセントが現れたことは調査票Aの結果にみられた傾向と合致するものである。③はピッチの下降が1モーラ分遅れてしまった誤りである。②と⑤の誤りで興味深いのは語頭でHHおよびLLと2モーラに渡って同じピッチが連続している部分の2モーラ目がどれも長音か撥音であることである。すなわち「おおきい」、「れいぞうこ」、「せんせい」、「さんいん」、「きんようび」、「たんじょうび」などの語である。

日本語の音節とモーラとピッチの関係を「きんようび」という語を例にとって図A^(註4)のように示すことができよう。



一方、インドネシア語話者の拍節感覚では pangjang, simpan のような特殊拍の語を図Bのように分析する³⁾。つまり [n], [ŋ], [m] などの鼻子音はリズム上は非自立的な単位であり、日本語で撥音がリズム上独立した単位として捉えられるのとは音単位の捉え方が大きく異なる。音節意識の違いから調査協力者が図Aの LHHLL というピッチ配置を「低高低」型としてとらえてしまい、さらに日本語の語の構造を図Cのように分析してピッチを割り当ててしまったとは考えられないだろう⁴⁾。次節では特殊拍の有無によってピッチ実現にどのような傾向の差が現れたかを考察する。



4.2. 特殊拍の配置による分類

調査票の語を特殊拍の配置によって分類すると表10のようになる。以下この表の分類に従って韻律の傾向を分析してみる。

表10 特殊拍の配置による調査語の分類

	拍の配置	語数	語
A	* * *	4	いくら, カメラ, テレビ, いかが
	* * * *	3	アメリカ, かたかな, くだもの
B	* N *	4	どんな, なんば, へんじ, りんご
	* N * N	2	なんねん, さんにん
	* N * R	2	うんどう, せんせい
	* N * R *	4	ほんとうに, きんようび, なんようび, たんじょうび
	その他	3	まんねんひつ, てんらんかい, うんどうじょう
C	* R *	5	ビール, りょうり, とおい, ぼうし, ゆうべ
	* R * R	4	こうぎょう, ゆうめい, くうこう, おおきい
	* R * R *	2	ていりゅうじょ, れいぞうこ
	その他	4	えいがかん, ちゅうしゃじょう, ゆうびんきょく, しょうがっこう
D	* Q *	5	ノック, マッチ, きつぷ, きって, ぎっと
	* Q * R	2	ロッカー, じっしゅう

- A 特殊拍 /N/, /R/, /Q/ を含まない語のグループ
 B 第二モーラが /N/ である語のグループ
 C 第二モーラが /R/ である語のグループ
 D 第二モーラが /Q/ である語のグループ

4.2.1. 調査票Aの分析 — 特殊拍の配置から見て —

表11は第二モーラの種類別にアクセント表記通りに発音できた率をまとめたものである。/R/ と /N/ の場合に誤って発音する傾向が強い。

表11 第二モーラの種類と表記通りに発音できた率

第二モーラの種類	Q	*	R	N
表記通り発音した率	81%	70%	47%	38%

次に調査票A（アクセント表記なし）の録音資料を表10に整理した特殊拍の配置による分類に従って分析した結果を表12から表19にまとめた。ここでは二点の分析を行ってある。第一点は語頭の2モーラが同じ高さになっているかについてである。ピッチ配置がHHまたはLLとなっているものは+、そうでないものは-とした。もう一点は語の基本的なピッチパタン⁽⁵⁾の分類である。ピッチが高から低へと変化しているか、低高低と変化しているか、低高と変化しているかを分類した。この分類ではたとえばHHHLもHHLLもHLLLも「高低」と分類されることになり、ピッチの高低変化が基本的にどのようなパタンになる傾向があるかを探ろうとするものである。

表14, 15, 16, 17から読み取れるように語頭の2モーラが*Nないし*Rである語は、ふたつのモーラがHHというピッチを与えられる傾向が強い⁽⁶⁾。これは4.1.2の終わりで述べた予想と合致する結果である。また3モーラの語で特に顕著であるが、高から低へとピッチが動くパタンが好まれる傾向がある。(表12, 14, 16, 17, 18, 19)

表12 拍配置〈***〉の語

(サンプル数=60)

ピッチ配置／実数／ パーセンテージ	最初の2モーラ のピッチが同じ	高 低	低高低	低 高
HLL 18 30%	-	+	-	-
HHL 15 25%	+	+	-	-
LHL 13 22%	-	-	+	-
LHH 12 20%	-	-	-	+
他 2 4%	/	/	/	/

+：該当する -：該当しない /：判定せず⁽⁶⁾

表13 拍配置〈* * * *〉の語

(サンプル数=45)

LHHH	24	53%	-	-	-	+
LHHL	11	24%	-	-	+	-
LHLL	8	18%	-	-	+	-
他	2	4%	/	/	/	/

表14 拍配置〈* N *〉の語

(サンプル数=60)

HHL	37	63%	+	+	-	-
HLL	7	12%	-	+	-	-
LHH	6	10%	-	-	-	+
LHL	6	10%	-	-	+	-
LLL	3	3%	+	-	-	-
LLH	1	1%	+	-	-	+

第15表 拍配置〈* N * N / * N * R〉の語

(サンプル数=60)

LHHL	20	38%	-	-	+	-
HHLL	18	30%	+	+	-	-
LHHH	8	13%	-	-	-	+
他	14	18%	/	/	/	/

表16 拍配置〈* R *〉の語

(サンプル数=75)

HHL	41	55%	+	+	-	-
LHH	9	12%	-	-	-	+
LHL	9	12%	-	-	+	-
HLL	8	11%	-	+	-	-
LLL	6	8%	+	-	-	-
LLH	2	3%	+	-	-	+

表17 拍配置〈*R*R〉の語

(サンプル数=60)

HHL/HHLL	22	37%	+	+	-	-
LHH	13	22%	-	-	-	+
LLL/LLLL	9	15%	+	-	-	-
LHHL	6	10%	-	-	+	-
LHLL	3	7%	-	-	+	-
他	7	10%	/	/	/	/

表18 拍配置〈*Q*〉の語

(サンプル数=75)

HL	28	51%	/(*)	+	-	-
LH	28	37%	/(*)	-	-	+
LL	9	12%	/(*)	-	-	-

表19 拍配置〈*Q*R〉の語

(サンプル数=30)

HLL	14	47%	/(*)	+	-	-
LHH	7	27%	/(*)	-	-	+
HHL	3	10%	/(*)	+	-	-
LHL	3	10%	/(*)	-	+	-
LLL	3	7%	/(*)	-	-	-

(表18, 19の* : 第二モーラが/Q/ でピッチを測れないため判定せず)

4.2.2. 調査票Bの分析 — 特殊拍の配置から見て —

調査票Aを特殊拍の配置によって分類してみると語の2モーラ目がNまたはRである場合(*N*, *N*N, *R*, *R*Rなど)と普通のモーラである場合(***, ***)とで韻律に異なる傾向が現れることが分かった。ここではこの両グループにアクセント表記が付されたものがどのような結果をもたらしたかを比較対照する。上述の傾向が特殊拍の配置を因子として現れるのであれば、アクセント表記がその通りのピッチとして実現されるか否かも特殊拍に影響を受けると予想できる。

表20 カメラ, テレビ (拍配置: ***, アクセント型: HLL)

○	24例 (80%)
×	6例 (20%)

表21 どんな, なんば (拍配置: *N*, アクセント型: HLL)

○	9例 (30%)
×	21例 (70%) そのうちHHLとしたもの: 15例

表22 ビール, りょうり (拍配置: *R*, アクセント型: HLL)

○	14例 (47%)
×	16例 (53%) そのうちHHLとしたもの: 15例

表20, 21, 22に明らかなようにアクセント表記を付した調査票でありながら実現されたピッチ配置は, 特殊拍のないものは発音しやすく第二モーラがNかRであると発音しにくいという傾向を示しており, これは調査票Aの分析結果と照応する。この事実は, 特殊拍がピッチ配置に強く影響を及ぼしているであろうという予想をさらに補強するものと解釈できよう。

5. 本研究のまとめと今後の課題

15名のインドネシア人日本語学習者の発音の調査から次のような傾向があることが認められた。

1. 第二モーラが/N/ないし/R/である場合, 語頭の2モーラがともに高いピッチで発音される傾向がある。
2. 特殊拍を含まない語の場合, アクセント表記が付してあると比較的表記の通りにピッチが実現される。
3. アクセントが付されていない場合, 特殊拍の有無を問わず, ピッチは基本的に高から低へと下がる動きを見せる傾向がある。

語の韻律がある傾向を見せるとき, それが単純な母語の干渉による韻律の現れなのか, 中間言語として一時的に安定した, あるいは化石化した韻律の現れなの

かが判断できない場合がある。第二言語学習において統語論レベルあるいは意味論レベルでの中間言語の研究が行われているのと同様に、今後音韻システムの転移、習得の過程を研究する必要がある。また母語の干渉の可能性を検証するためにインドネシア語の分析を行う必要もある。その際、両言語の韻律を対照的に観察、分析するだけではなく音節や拍のレベルでの語の音声的構造の対照的考察を並行して進めなければならない。

注

- (1)ここでは「中間言語」という用語を、普遍的な現象としての「中間言語」ではなく、ある母語を持つ学習者がL2を学習する過程で見せる一時的な（あるいは化石化した）安定した誤りの体系を指す狭い意味のものと考えていただきたい。中間言語の解釈については上智大学外国語学部英語学科教授 吉田研作氏から助言を得た。
- (2)1991年10月16日文部省重点領域研究「日本語音声」D-1 班月例会での談話
- (3)インドネシア語の語レベルでのピッチについては諸説があるが、ここでは筆者が数名の調査協力者について行った調査結果に基づき pang-jang に対して H-L というピッチ表記を施したものである。音節分析については文献(18)を参照した。
- (4)図A, B, Cの作成については国立国語研究所員 前川喜久雄氏の助言を得た。
- (5)この考え方の端緒は前川喜久雄氏と筆者が共同で韓国人の日本語発音における韻律の傾向を分析していたときの前川氏のコメントにある。
- (6)「他」としたものの中には様々なピッチ配置が含まれているため判定ができなかった。

参考文献

- (1) 今田滋子(1983)『教師用日本語教育ハンドブック⑥ 発音』凡人社
- (2) 宇田川洋子(1991)「インドネシア人日本語学習者の日本語に見られるインドネシア語の韻律の干渉」『日本語の韻律に見られる母語の干渉—音響音声学的対照研究—』文部省重点領域研究「日本語音声」D-1 班 平成2年度研究成果報告書
- (3) 大西晴彦(1977)「タイ人のアクセントに関する若干の考察」『国際学友会日本語学校紀要』2号

- (4) 大西晴彦(1982)「タイ人用日本語発音練習教材について」『国際学友会日本語学校紀要』6号
- (5) 大西晴彦(1990)「韓国人の日本語のアクセントについて」『国際学友会日本語学校紀要』15号
- (6) 金田一春彦編(1985)『明解日本語アクセント辞典』
- (7) 坂間博, 松島幸男, 新田洋子(1991)「ドイツ人学習者の日本語に見られる母語の韻律の干渉」『日本語の韻律にみられる母語の干渉—音響音声学的対照研究—』文部省重点領域研究「日本語音声」D-1班 平成2年度研究成果報告書
- (8) 佐藤美重子(1986)「インドネシア人学習者に対する日本語の音声教育に関する小考」『日本語教育』60号
- (9) シンポジウム「日本語音声の韻律的特徴と日本語教育」—シンポジウム報告—(1991)文部省重点領域研究「日本語音声」D-1班
- (10) 助川泰彦(1991)「インドネシア人学習者の日本語発話のプロミネンス」『日本語の韻律に見られる母語の干渉—音響音声学的対照研究—』文部省重点領域研究「日本語音声」D-1班 平成2年度研究成果報告書
- (11) 高橋ゆり(1989)「中国帰国者のための音声シラバス」『日本語教育』68号
- (12) 土屋順一, 土屋千尋(1991)「モンゴル人学習者の日本語に見られるモンゴル語の干渉」『日本語の韻律に見られる母語の干渉—音響音声学的対照研究—』文部省重点領域研究「日本語音声」D-1班 平成2年度研究成果報告書
- (13) 土岐哲(1980)「英語を母国語とする学習者におけるアクセントの傾向」『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』3号
- (14) 堀口純子(1973)「英語国民による日本語の四音節名詞のアクセントの予測とその実際」『日本語教育』19号
- (15) 前川喜久雄(1990)「無アクセント方言のイントネーション：試論」『音声言語』N号, 近畿音声研究会
- (16) Dickerson, W. (1986) 'Explicit rules and the developing interlanguage phonology' in A. James and J. Leather (eds.), *Sound Patterns in Second language Acquisition*, Dordrecht Holland, Foris 121-140.
- (17) Halim, Amran (1974) *Intonation in Relation to Syntax in Bahasa Indonesia*, Jakarta: Djambatan.
- (18) Suparyanto (1983) *Kamus Penyukuan Kata Indonesia* (インドネシア語音節辞典), Jakarta: Sinar Pengetahuan.

The Influence of Syllabic Structures on the Accents of Indonesian Learners of Japanese

SUKEGAWA Yasuhiko

Tendencies in Japanese accents of Indonesian learners are examined in relation to syllabic structures of Japanese words. Recordings of 50 words by 15 subjects are analysed from the standpoint of pitch arrangement and syllabic structures. The result of the analysis suggests the following tendencies in the Japanese pronunciation by the subjects examined.

1. The first two morae are likely to be assigned high pitch when the second mora is either a syllabic nasal /N/ or a long vowel /R/.
2. It seems easier for the subjects to realize the pitch patterns which are given to words tested when the word does not contain either /N/, /Q/, or /R/.
3. When no pitch pattern is given to the words tested, the subjects show a tendency that the basic prosody begins from high pitch and ends in low pitch regardless of the syllabic structures.